正休寺だより

第12号
2024年8月1日発行
青森県北津軽郡板柳町
大字板柳字土井241
TEL. 0172-73-2016

初御講

ワンマンショーで笑顔 一緒に食べる御斎で笑顔

誰かと会い、言葉を交わす、そういう場所作りを続けていきたい思いで、しばらくの休止を経て二月二十八日初御講を再開いたしました。百三十名ほどの参加者で本堂がいっぱいになった様子に、懐かしさと嬉しさで心が弾みました。

青森県出身で、アメリカのエルヴィス・プレスリーコンテストで入賞するなど幅広く活動されているエルヴィス・トキさんが登場すると、本堂が一気にコンサート会場に。プレスリーの曲はもちろん、日本の歌謡曲も披露。始めは静かに聴いていた人たちも、手拍子をしたり立ち上がって一緒に踊り始めるなど、本堂内が一体となる盛り上がりとなりました。国内外で活躍される貫禄はさすが。踊るたびにずれてしまう少し窮屈そうに見える衣装を、直しながら歌う姿がおちゃめなトキさんでした。

また、御斎については各講中に参考にしていただけるように献立を工夫し、一月一日に起きた能登半島地震に思いを寄せたく、石川県の郷土料理『治部煮』も一品に加えました。

「お寺でプレスリーってどうなる事かと思ったけど、とても楽しい時間だった。久しぶりにお腹の底から笑ったよ。」との感想もあり、清々しい表情をして帰路に着く皆さんは、ちょっぴり若返ったように見えました。

お庫裡からのつぶやき

今年春、大阪にある実家をほぐすことになりました。電話で話を聞き「古くなったもんね。仕方がない。」と返事はしたものの、生まれ育った家が無くなるのはやはり寂しい。帰る場所が無くなるという思い、そしてそこで過ごした二十五年間が全て消えてしまうようで、たいそう切なさを感じました。

五歳下の弟が可愛くて、母親気取りで世話をやいていた幼少期。小学生の頃は母と並んで料理を作るのが好きでした。そして八つ当たりをしたり無愛想な態度をとった十代後半。それでも心配をして私に向けてくれる両親の眼差しはいつも優しく、素直になれない申し訳なさで心が痛かった。

そんなことを思い出していると気づきました。形としての生家は無くなっても、私がそこで生活した事実は無くなることはないと。そこで過ごした時間すべてが今につながっている。経験したこと、感じてきたこと全部が、一つ一つ進んできた糧となり今の私がある。

親に見守られて時を過ごしました。そして見守ってくれた親にも親がいます。その上にもまた親がいて、ずっとずっと続いてきた長い時間。そこにはいつも願いがあったことでしょう。そんな尊い時間を私は今いただいています。生まれて老いて、移り変わりながらまた次へとつながっていく。温かく深い願いと共に賜った奇跡の時。今この時をどう過ごすか、大切に考えていきたいと思うことです。

（坊守）

2023.12.5
念珠づくり（浄土真宗now）

2023.12.15
ビンゴ大会（同朋の会）

2023.12.31 除夜の鐘

2024.7.17
日帰り研修旅行（同朋の会）

◆ピックアップ◆
～楽しい行事をご紹介～

2024.3.1
真宗に親しむ集い（in藤崎町）

2024.6.5 西本願寺副住職のお話（浄土真宗now）

2024.5.19 オンライン研修会

2024.4.5
和菓子作り（浄土真宗now）

後世の救いを求めて

人が死んだらいったいどうなるのか。

昔から言われるのは、人が亡くなると死出の山路を七日間進み、そこで賽の河原にたどり着き、三途の川を渡る。この川を越えるともう元の世界には戻れない。冥界では、十人の王（一番知られているのが閻魔大王）の前で裁きを受け、次に生まれ変わる世界が決められる。しかしそれで終わりではない。生まれ変わっても、やがて寿命が尽きれば、また生前の報いを受けて、永遠に輪廻転生していくこととなると信じられていた。

そのような中で親鸞聖人は、二十九歳の時、自身の後世（死後）の救いを求め、京都の六角堂で百日の参篭（修行）をされたのです。その九十五日目の明け方に聖徳太子が夢の中に現れてお言葉をお示し、それにより、すぐに六角堂を出て、来世に救われる教えを求め、法然上人のお弟子になられたのでした。

その時に親鸞聖人の心の上に大転換がありました。それまでの冥界の王の裁きにより、善人が救われ、悪人は救われないという常識から、善人にも悪人にも同じように、「迷いの世界」を離れることのできる道を法然上人からお聞きしたのです。

それまで親鸞聖人は「罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身」であり、「愛欲に溺れ、名利（名誉心）に迷う」しかない我が身は、かの冥界の王の裁きを受けたなら地獄行き間違いなしと思われていたに相違ありません。

そんな我が身が、ただ念仏により、命終後ただちに阿弥陀の極楽浄土にお救いいただくことができると教えて下さったのが法然上人であったのです。

これにより親鸞聖人は「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と自身の後世の救いに決着されたのでした。

ただし、ここで注意することは、念仏とは極楽浄土に生まれる為の手段として声明念仏ではなく、私の思いを越え、私を支えてくださっている全てのご縁が、私の上に成就するところの絶対他力の念仏なのです。

そして、この絶対他力において、仏教の本質の一切は「空」にして「無我」なりということが成り立つのであり、そこに永遠に、輪廻転生する「我」を否定することにより、迷いの世界から抜け出すことができるのです。

（文責・住職）

本堂にて募っておりました、令和六年一月一日に発生した能登半島地震救援金は、五月十五日付で送金いたしました。能登半島には真宗大谷派の寺院が多くあり、被害状況も報告されています。皆様よりお預かりしました救援金は、本山を通じて被災地へお届けいたします。

206,422円

御講の様子

【三月　沿川講中】

世話方さんから、地域の方へ、当番に当たっていることを知らせるお声がけをしてくださり、たくさんの方が朝早くから集合。永代経最後の日程、御斎の席に着いたのはおおよそ百二〇人。終了後は、皆さん揃って恒例となっている反省会も行われ、御講当番再開の先陣をきるということでいろいろな心配があったことでしょうが、素敵なチームワークでまとめていただきました。

【四月　新和講中】

春先は参加人数の予想が難しい時期。そういう中で、食材が無駄にならないように工夫をしながら御斎の準備をする皆さんの姿。新和講中のあの穏やかでやわらかい雰囲気がそこにはありました。そうめんの上に彩のいい薬味がのった汁物をいただくと、以前作ってくださっていた時のことを思い出し、懐かしさがよみがえってきました。

【五月　板柳講中】

十人程の有志が集まり、意見を出しながら献立を決めました。津軽の郷土料理『ねりこみ』をはじめ、手作りの料理がずらり。食後は、準備をして下さった温かいお茶を飲みながら皆さん一息。会話もはずみ、席を立つのが名残惜しそうな様子が印象的でした。「御講に来てよかったと喜んでもらいたい」その思いが伝わる温かい御斎の場でした。

親鸞聖人の御命日、お寺は重なり合う声とたくさんの表情であふれました。
帰り際に「御講やってよかったと思うよ！」と伝えて下さった一言は幸甚の至り。
何とも嬉しく心に響きました。

他力本願で大丈夫？

法事の際お尋ねされた事があります。その方は嫁ぎ先では毎日お膳をお供えしているのに対して、浄土真宗のお内仏はお仏供(ご飯)だけでいいと聞き驚いたそうです。それで法話の際、私の口から他力本願という言葉が出たものですから、思わず声が出たという事でした。

私たちが日常の中で他力本願という言葉を使う際は、人の力を借りて自分は楽をする、こういった意味で使われる事が多いのではないでしょうか。

ですが、仏教において「他力」は人間の力ではなく、仏さまの力を指します。この事を親鸞聖人は『他力と言うは、如来の本願力なり』と仰っています。如来というのは阿弥陀仏のことですから、阿弥陀仏の力が他力だと言うのです。親鸞聖人は二十九歳から九十歳で亡くなられるまで生涯他力をたのみにされました。聖人の他力をたのむということは、自分はなにもせず楽をする事ではありません。本願を拠りどころにして生きるということです。拠りどころとは本願を聞信し念仏申す事です。私たちの生活においても、説明や話を聞く事無く相手を頼ったり納得する事が出来るでしょうか。そこにはなんらかの言葉や信頼関係がないとなかなか頷けません。あっても頷けない、頷こうとしないのが私たち凡夫です。そういう私たちを目覚まそうとあらゆる手段を尽くしてはたらきかけるのが他力です。大切なのは願う側ではなく、願われている側の問題です。聞かないところに信は立ちません。つまり他力本願という教えが不安材料なのでは無く、そこから背を向け、縁次第でいかなるふるまいをもする人間が常に危険で危ういのです。だからこそ親鸞聖人は生涯念仏申されました。

その「南無阿弥陀仏」に触れた時、これまでの生き方がいかに自分中心で、自己の幸せや利益ばかりを追い求めて生きてきた私の姿が、阿弥陀という一切平等の教えによってあぶりだされるのです。そんな自身を深く嘆き恥ながらも、そういう生き方しかできない者を必ず救うと誓った本願を拠りどころとし、命を生ききられたのが親鸞という人であり、私たちに示してくださった他力本願という道ではないでしょうか。

（副住職）

お内仏に学ぶ ～華瓶編～

お寺の本堂や自宅のお内仏(お仏壇)は、阿弥陀仏の極楽浄土という仏様の世界をかたちとして表しています。そのお荘厳の中に、華瓶という仏具があります。華瓶には水を入れ、樒を挿します。浄土真宗では、コップなどにお水を入れてお供えするという事はないので、お仏供(ご飯)だけと思われる方が多いかもしれませんが、華瓶に樒を挿す際は必ずお水をいれるので実はお水をお供えしているのです。樒は水を清浄に保つとされていて極楽浄土に流れる八功徳水という水を表しています。

実家にも樒の木があり、おばあちゃんが苗から育てた樒は三メートルくらいにまで大きくなりました。本堂にお供えしている樒も実家からもらったものを使っています。そして今回ご縁があり親戚の方から苗を送っていただきお寺の境内に植えました。寒さに弱い樒は青森県で育てるのはとても難しいそうです。猛暑で乾燥が気になる時期や、長く雨が降らない時に水やりが必要ですが、それ以外の時期は水を与えすぎると根腐れしてしまうのだとか。

今回数種類の樒をいただいたので、毎日観察しながら大きく育ってくれることを願いたいと思います。

※【八功徳水とは】
甘、冷、軟、軽、清浄、不臭、飲時不損喉、飲已不傷腸という八つのすぐれたはたらきがある水のこと

（若坊守）